



藍の生葉で

青を染める

平成30年7月分

はじめに

雨の被害がニュースで聞こえてきます。こころより皆様の無事をお祈りします。さて、徳島では藍は順調に育っており、雨の合間を縫って収穫が始まっています。例年50、60cmに育つ頃には、隙間のないほど大きくなっています。収穫の際には、耕運機を改造した刈り機が、畝の上に刈った藍を並べて進んでいきます。その後を一抱えほどの束にまとめてくるのは、昔ながらの人手です。それをまとめて車に積み上げ、製藍所に運びこみます。それを機械にかけて切り、葉と茎をより分けるために大きな扇風機を回して葉を飛ばし、かき集めて広いセメンの広場で乾かします。途中で箒で掃いて、裏返ししながらカラカラになるまで乾燥します。急に雨が降り出すと大変なので、乾燥機に入れて乾かすこともあります。大きなカマスに入れて、9月まで保存するのです。製藍所の夏は機械化されたと言っても大変な時です。伝統の世界の重みを感じます。

我が家では、機械がありませんので鎌での手仕事です。2回目の収穫をする時の為に、早く大きくなるよう、茎を根から10cm程残して上を刈ります。刈った後、お札肥や害虫よけのオルトランを施します。草取りも欠かせません。刈った時に、茎の下のほうに赤い根が見えていませんか。それに土を寄せてやると、株が増えます。草丈が大きくなる原因のひとつに肥料喰いがありますので、化成系の肥料や硫安などをやります。ただし、藍に直接当たると枯れることもありますので、気をつけます。すくもに乾燥する時は、露の切れた午後に刈りますが、生葉で使う時は朝刈が適しています。一輪車に乗せて我が家に運び、乾かないうちに葉をちぎります。沈殿藍をつくる時も、朝に刈ります。大量に藍を植えた方は、一番刈りの藍葉を乾燥させてすくもを作ることにも出来ます。私は大半を沈殿藍にしています。沈殿藍については前回ご紹介しました。

5月にお送りしたリュウキュウ藍も、植えかえると大きく育ちます。ただし、日照りの強い畑に植えると葉がちぢれてきます。梅雨が明けると寒冷紗等で日陰を作

ってください。育ったら大きな葉から千切って使います。草丈が大きくなれば、茎を切ってさし木をし、たくさん葉を殖やしてください。

この藍は、ジュースにするとタデ藍より緑がかった色になります。水に2, 3日浸けてそのまま染めたり、沈殿藍を作ったり、また後で紹介します紫の染めに使うのに適しています。

タデ藍の苗の世話

植付けをしてから藍の根の両側に寄せ土をします。今まで低かった根の回りを高くしていきます。2回に分けて10cm程の高さの畝に寄せます。プランターの場合は土を入れてやります。日照りの時は水をやりますが、葉にかけるのではなく根元に土をかけます。大きくなると肥料も与えます。野菜用の肥料を使用するのですが根元の近くに置きます。ただし、藍に直接触らないよう注意します。

また梅雨に入ると水を吸って見る見るうちに50～60cmくらいに育ちます。その間、草取りや虫退治の作業が待っています。我が家でも草取りに大わらわです。きられや根きり虫などは野菜用の薬剤を使用します。散布については添付の注意を守って作業をしましょう。無農薬を通すならば、1匹1匹取り除いてください。ニンクや辛子の煮出し液を酢酸でのぼして与えるとよいようです。

藍の刈り取り

梅雨が終わる頃、藍は50～60cmになり、緑色を増してびっしりと敷き詰めたように大きくなります。晴れた日に朝露が残っているときに藍を刈ります。暖かい地方では6月終わりに刈り取りの時期を迎えます。北の地方では1～2ヶ月くらい差があると思いますので、藍の成長を見て刈る時期を決めてください。



絵①

藍は土から10～15cmほどの葉の少ないところを残して刈ります。これは2回目の収穫を早めるために置きます。刈り取った茎からなるべく早く葉を取ります。絵①のように片手で上のほうを持ち、もう一方の手で下の方にしごくようにすると早く葉が取れます。集めた葉はさっと洗います。

藍 葉 の 量

順調に梅雨を迎えると、早いところでは6月の終わりから7月の初め頃に一番刈りを迎えます。いよいよ体験開始となります。そこで、この実習をすべて体験するにはどれくらいの葉が必要か考えてみました。

① 沈澱藍 [Ⓐ] 水に浸けて攪拌、沈澱	生全草 3 kg以上	<一番刈>
沈澱藍 [Ⓑ] 塩で揉んで煮出し、沈澱	生葉 500g	<一番刈>
② 青を染める…ジュース、又は塩もみ	生葉 200g	<一番か二番刈>
③ 黄、緑、灰色を染める…湯等に浸ける	生葉 300～500g	<二番>
④ 赤紫、紫、灰、茶色を染める…醗酵後煮染め	生全草 1～3 kg	<二番>
⑤ すくも、醗酵させて藍建て 又は乾燥葉建て又は煮出し染め(黄)	乾燥葉 3～5 kg	<一番か二番刈>

生全草とは葉も茎も含めたもの、生葉とは葉のみを表します。

最低の分量を見積もってみました。皆さんがどれだけの面積を作られたかはさまざまでしょう。広い面積を作られた方、またはプランターでの作などあると思いますので、自分の作った藍でどれだけの体験が出来るか選ぶ必要があります。どの体験に重きをおくかを各自決めていただくことになります。そこで藍がどれだけ収穫できるか考えてみることにしました。徳島ですくもを作るために藍作をされている方にお尋ねしましたところ、1アール約100平方メートル(30坪)で乾燥葉20kgの収穫だそうです。

それだけの量を植えられた方はあまりないかと思しますので、その10分の1を考えてみましょう。

乾燥葉2kgだと生葉12、13kgと見ましょう。1回目に刈った藍(一番刈)をどの実習にあてたいかと申しますと、インディゴの分量が多いことから沈澱藍か、すくもにあてます。その後の色出しは、2回目に刈った藍(二番刈)で行います。インディゴ分が多いと赤紫を染めるには適していません。参考のために上記にその実習に適したものを<>表記してあります。これらを参考にしながら7色の解説に入ることにします。

藍の生葉で青を染める方法は何種類かあります。生葉の中の藍分は水に溶け出す性質がありますのでそれを利用して生の汁で布や糸を染めます。ただし、この方法だと動物性繊維しか染めることができません。まず、その方法を2種類解説します。次に、植物性繊維を染める方法として、藍建てして染める方法を2種類解説します。

A 生葉塩もみ法での染色



絵②



絵③

ボールに洗った葉と塩を加えて揉みます。(絵②) 少なくとも200gの葉は欲しいと思います。塩は20g程度とします。手早く5～6分揉んでください。手早くすることが色を美しくします。力強く揉んでください。(絵③)

揉み終わったらスカーフに葉を絡めて、ビニールに入れて10分間揉み込みます。葉の量が多いほど色が濃くなります。染めたら今度はムラ無く日にかざすようにしてさっと広げ、発色させます。その後冷水につけてよく洗います。洗いが足りないと変色の原因となります。そして、同じように日光に当てて乾かします。生葉の場合、お湯で洗うとくすんだ色になります。また染め重ねると濁った色になりますので、なるべく藍の量を多くして1回で染めます。

B ミキサーによる生葉染色

この方法は、以前から生葉染めとして一般に行われているミキサーを使用する方法です。この方法で特に気をつけるのは、“天気の良い日の気温の上がない午前中に染める”ということと、“氷水を使用すること”です。

氷の塊が入るとミキサーを傷めますので、塊をよけて冷たい水だけを入れます。ミキサーの力が弱かったためか、以前、粉碎中にオーバーヒートをおこして機械が動かなくなったことがあります。特に講習などで大勢の人が使う場合トラブルが多いので注意して使用しています。皆さんもミキサーの取扱いには注意しましょう。また、続けてたくさんの液を作ると液温が上がって色が悪くなりますから、少しず

つ作って染めてください。

ミキサーに入れる葉の量は一杯につき100g程です。ミキサーに半分水を入れ、葉を少し入れてスイッチを押します。いっぱいになるまで葉を少しずつ入れていきます。このまま染めると糸に葉のカスが付いて取りにくいのでジュースにした後、布で漉します。時間をかけますと色が悪くなりますから手早くします。(絵④)



絵④

ここでは糸を染めてみましょう。ミキサー2杯分位が糸ひとかせに必要です。絹糸や毛糸はぬるま湯につけた後、脱水しておきます。糸にはゆるくかせ紐をつけておきます。液の中でシルクやウールの糸を繰るようにして10～15分程染めます。液が多いほど濃い色に染まります。毛糸はあまり手荒くしますとフェルト化しますので注意しましょう。

染めましたら竿に通して空気で酸化させた後、やさしく水で洗います。仕上げに薄い中性洗剤を使用して再度洗います。竿に通してパンパンはたきながら薄く広げて干します。

シルクのスカーフ等を染めるときは④と同じ要領で染めます。

C

生葉の藍建てによる染色(A)

(P. 124・125、138・139参照)

今まで述べた④、⑤の方法で麻や木綿を染めると、薄い緑がかった色しか染まりません。麻や木綿で藍色を染めるためには藍建てをします。藍建て(液をアルカリ性になると藍の成分インディゴが溶け出す。それを還元させて染め液にすること)に必要なアルカリ剤として苛性ソーダ、ソーダ灰、消石灰、木灰等を使用します。今回使用するアルカリ剤は消石灰です。

また、還元剤としてお酒、ブドウ糖、ふすま、水飴、ヒドロサルファイト等があります。今回は、自然を大切にとの思いから時間がかかりますが、ブドウ糖かお酒を還元剤として使用する建て方を解説します。

先の方法で取った藍生葉のジュースは漉さないでそのまま液にします。先の③で染めた残液も葉のカスも同様に使用できます。これらの液を合わせて混ぜ、消石灰又はソーダ灰を1ℓにつき大さじ1(15cc)加えます。朝夕攪拌しながら2～3日置き、ブドウ糖かお酒を、消石灰又はソーダ灰の半量加え攪拌します。液の表面に青い泡が浮くと染めることが出来ます。添付の見本のような色に染めることが出来ます。この液は、朝夕は布で覆い、日中は陽の当たる場所に置いて温度管理をし、毎日混ぜると長く染めることが出来ます。

速成で早く染めたい時は、ヒドロサルファイトを使った化学建てをします。ガイドブック138頁を参照して建ててください。但し、ヒドロは熱を加えたり、激しく攪拌すると有毒ガスが発生しますので、吸わないよう十分に注意してください。また、生地に残ると傷めますので洗剤でよく洗ってください。

D 生葉の藍建てによる染色(B)

沈澱藍を取るために藍を刈り取り、水に浸けます。90リットルのポリタンクに2日半、約60時間水に浸けて、草を取り出します。

液の中に残ったゴミや葉をザルで取り除きます。ソーダ灰を100g入れ、よく混ぜます。ブドウ糖(又はお酒)を入れ、混ぜて1日おきます。上に藍色の華が咲いたら染めます。泡の色が悪い時はヒドロを5gくらい入れて下さい。

【 同封したもの 】

- シルクスカーフ . . . ターコイズブルーをジュースで染めてください。
- 木綿ハンカチ
- ソーダ灰 200g
- ヒドロ 100g . . . 密封して保存して下さい。固まると使えません。
- 染め見本

※木綿は藍建てしないと濃い色に染まらないことに注意して下さい。

- 写真集 (A4用紙に写真①～⑥を印刷したもの)